

## 面食いだつた鷗外

清水 勝

「何でも読もう会」のメンバーで、森鷗外記念館を訪ねた。鷗外の作品以上に彼の私生活に興味を持った。

明治二十二年、ドイツ留学時代の恋人エリーゼが鷗外を追って日本にやってきた。森家とつての一大事、義弟小金井義精の努力により円満に離日させた。一方、鷗外は登場人物を巧みに仕組みつつ悔恨の気持ちで処女作『舞姫』を書いた。

鷗外留学中には恩人西周からの縁談が進められていた。相手は西周の親友海軍中将男爵赤松則良の長女登志子であった。

十七歳の登志子との新居には鷗外の文芸仲間の出入りが多く、慣れない登志子はその対応に苦労していた。長男於菟が生まれた直後に離縁されてしまった。結婚して僅か一年八カ月だった。

鷗外は「気性が合わず、文筆活動の妨げだ」と書いている。鷗外の母峰子は「お登志さんがもつと器量がよかつたら林も嫌わなかつたらう」と後日、於菟に語っている。

鷗外は欧州で出会った美しい女性と登志子を比べたのではないだろうか。登志子はその後再婚したが、二十九歳で病死している。

鷗外は初婚の失敗から再婚については慎重になっており、母峰子はエリーゼ事件のようなことが起こると困ると考え、未亡人で仕立物をしている身ぎれいな児玉せきを知り、鷗外の住む千駄木の近くの借家に住まわせた。いわば鷗外の母親公認の妾となり、鷗外が再婚した際には身を引き、その後も峰子とせきは親しくしていたようである。

鷗外三十八歳の時に小倉勤務となり、母親峰子はまたもや心配をし、早く再婚をさせねばと考えた。友達に紹介された荒木志げは素晴らしい美人だとの手紙を書いて結婚を薦めた。

荒木志げはその美貌を望まれて銀行家の息子と結婚したものの放蕩息子と判り、判事の父親が僅か二十日で引き離れた。

鷗外四十歳、志げ二十二歳。小倉では幸せな新婚生活を送っていたが、東京への転勤となり、千駄木の家で、大家族と共に生活を始めた。そのため鷗外は嫁・姑の確執に苦労したようである。

### 〈参考文献〉

- ・『鷗外・五人の女と二人の妻』 吉野俊彦 1994 文藝春秋
- ・『鷗外の坂』 森まゆみ 1997 新潮社
- ・『鷗外と女性』 金子幸代 1992 大東出版
- ・『鷗外追想』 宗像和重 編 2022 岩波文庫